

サマリー

(研究ノート) ポスト 3.11 における日本の石油精製業概観

—2020 年の需給バランスとガソリンのオクタン価—

計量分析ユニット 研究主幹 平井 晴己

2011 年 3 月 11 日発生した東日本大地震と福島原発事故は、日本の政治・経済・社会に大きな影響を与え、今後のエネルギー政策の有様を大きく変える契機となった。石油産業も被害を受けたものの、系統電源に全く依存することなしに、燃料の貯蔵が可能で、かつ移動が容易な自動車（ガソリンや軽油などの内燃機関を駆動源とする）の重要性が改めて認識され、さらに、これを支える、石油製品のロジスティックス(製油所・油槽所・SS)についても、その強靱さと有効性（ライフラインとしての価値）が高いことが実証された。その他、一時的なものではあろうが、原発の停止と復興需要による石油製品需要の増加もあって、これまで言われてきた急激な需要の減少は押しとどめられ、当面は緩やかな減少が持続する可能性が高い。

本稿では、こうした環境の変化を念頭に、2020 年における需要の予測と需給バランスの最適化を検討し、1つの量的なイメージを描いてみた。勿論、1つの断面ではあるが、需要・供給ともうまくバランスすることが分かった。また新增設を行わず、どの程度、生産パターンが変更可能かについて、ガソリンのオクタン価アップを参考例としてとりあげ、合わせて精製・燃焼・燃費向上等の各段階での CO2 排出への影響について試算を行ってみた。

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp